



李 白

武部利男 訳

世界古典文学全集

27

筑 摩 書 房

李 白

世界古典文学全集 第27卷

昭和47年4月25日第一刷発行

訳 者 武 部 利 男

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所 株式 筑 摩 書 房
会 社

東京都千代田区神田小川町2-8

振替東京 4123 電話 (291)7651

郵便番号 101-91

(分類) 0398 (製品) 20327 (出版社) 4604

目次

李白詩集

解説

年譜

参考地図

詳細目次

武部利男訳 5

武部利男 419

李

白

1 古風 その一

大雅の詩風はながらくすたれたまままだ
わたしが老衰したられが復活できよう
王風の詩はつる草の中にうちすてられ
戦国には雑草ばかりが生いしげった
竜と虎とが食うか食われるかとあそい
戦争は狂暴な秦までつづいた
正しい歌ごえはひそひそとなり
かなしみとらみが離騒の作者を生みだした
揚雄と司馬相如はくずれる波をかきたてたが
流れは開いてひろびろとはてしない
おこりすたりがあり千変万化はしたが
正しい詩法はすっかりほろんでしまった
建安以後の詩となると
綺麗ごとにおわって珍重するにたりない
わが唐の聖代は太古の姿にかえり
衣を垂れたままでおさまり清潔と真実を貴ぶ
才能ある人びとが平和で明るい御代に出あい
時代の動きに乗って活躍しだした
模様と生地がたがいにてりはえ
おびたしい星が秋の空にちりばめられる
わたしの志は古代の詩の伝統をつぐことだ
その光が千年さきをてらす詩集をつくらう

聖人の仕事にあやかって立派に完成したら
きりんをとらえたところで筆を絶とう

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	古風 五十九首
絶筆於獲麟	希聖如有立	垂輝映千春	我志在刪述	衆星羅秋晏	文質相炳煥	乘運共躍鱗	羣才屬休明	垂衣貴清真	聖代復元古	綺麗不足珍	自從建安來	憲章亦已淪	廢興雖萬變	開流蕩無垠	揚馬激頽波	哀怨起騷人	正聲何微茫	兵戈逮狂秦	龍虎相啖食	戰國多荆榛	王風委蔓草	吾衰竟誰陳	大雅久不作	古風 五十九首
筆を獲麟に絶たん	聖を希うて如し立つこと有らば	輝を垂れて千春を映さんとす	我が志は刪述に在り	衆星は秋晏に羅なる	文質は相炳煥して	運に乗じて共に鱗を躍らす	群才は休明に属し	衣を垂れて清真を貴ぶ	聖代は元古に復し	綺麗にして珍とするに足らず	建安自從り來は	憲章亦た已に淪めり	廢興萬變も	流を開き蕩として垠無し	揚馬頽波を激し	哀怨騷人を起せり	正聲何ぞ微茫たる	兵戈に逮ぶ	龍虎相啖食し	戰国には荆榛多し	王風は蔓草に委てられ	吾衰えなば竟に誰か陳べなん	大雅久しく作らず	古風 五十九首

「古風」いにしえぶり。むかしふう、という意味。李白は在来の文学、すなわち六朝ふうの詩、とりわけ齊梁の時代に流行した宮体とよばれる綺麗な詩は、詩としてだめだと考えた。詩の体裁を保っているにすぎず、中身はからっぽで、いきいきとした詩になっていない。詩は亡びた。古代において、それは生きていた。時代が下るにつれて、だんだんと亡びになり今日に至ったが、いまや、復活すべきときがきた。われこそは、その任務のいない手である、と李白は考へ、天下に宣言する。「古風其一」は、その宣言の詩である。

1 「大雅」中国の最古の詩集「詩経」の篇名である。「詩経」三百五篇は、国風百六十篇、雅百五篇、頌四十篇の三部分に分れるが、周の王室の歌である雅はさらに小雅と大雅に分れる。小雅七十四篇、大雅三十一篇、いずれも周の朝廷の音楽師によって演奏されたものであるが、小雅のほうは国々の民謡である国風に近い性格をもつのに対し、大雅のほうは、天命を受けた周の天子の徳をたたえとともに、天命を裏ぎるような政治家をきびく戒める内容をもち、莊重で重厚で敬慎の心にあちてゐるものが、その特長といわれている。「大雅」ということばそのものは、「大らかで正しい」という意味をもつ。李白は、ここで、ことばのひびきを最大限に利用している。「詩経」の、とりわけ大雅の、あの太らかで正しい詩風——というような意味あい、「大雅」といっている。

「久不作」作は、おこる。ながらくの間、おこらない。班固の「兩都賦の序」「文選」巻一に「王沢竭きて詩作らず」とある。

2 「吾衰」「論語」述而第七に、「子曰く、甚しいかな、吾が衰へたる。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず」とある。「冠」結局。「陳」申しのべる。陳述する。「礼記」の王制に、天子が巡狩するときには、「大師に命じて詩を陳べしめ、以て民の風を觀る」とある。

3 「王風」「詩経」の国風の中の一。紀元前八世紀初、周の王室が西方の異民族の圧迫をさげ、都を陝西省の鎬京から河南省の洛邑（今の洛陽）へ遷したばかりのころ、その新しい都の周辺一帯の歌謡である。これらの歌が、王室にちなむ歌でありながら、西周時代のように雅と呼ばれず、諸侯の国の民謡なみに国風のひとつとして「王風」と呼ばれるのは、周の王室の權威と機能の低下のためである、といわれている。「委蔓草」委は、うちすてる。草のはびこる中にうちすてられる。

4 「戦国」紀元前五世紀から前三世紀までの群雄対立時代。春秋時代のあと、小国は大国に併合されて、しだいに天下統一に向っていたが、秦・楚・燕・齊・韓・趙・魏が、戦国の七雄といわれて、相争っていた。「荆榛」荆は、いばら

と訓読する、灌木の名。榛は、木が叢生するさま。

5 「竜虎」たつと、とら。竜は空想の産んだ怪獣。虎はアジア特産の猛獣。ここにいる竜虎は、戦国の七雄をさす。班固の「答賓戲」「文選」巻四十五に「是に於て七雄雄闘し、諸夏を分裂し、竜虎争す」とある。「啖食」喰も、くらう。

6 「兵戈」武器、転じて、戦争。「逮」及ぶ。「狂秦」狂暴な秦。秦は天下を統一したけれど、焚書坑儒、書物を焼き字者を欠けめにする暴政を行なった。陶淵明の「飲酒」其二十に「漂流して狂秦に逮ぶ」の句がある。

7 「正声」正しい歌声。雅は正なり、という。正声とは、「詩経」、ことに大雅のような正々堂々たる歌声のこと。「何……」なんと……であろう。「微茫」あるかなきかの状態。

8 「騷人」「離騷」の作者である屈原（前三世紀）をはじめ悲憤慷慨の詩を作った一派の詩人たち。「離騷」は「楚辭」の代表作であるが、離騷の離は權の字と通用して遭う、騷は憂、離騷とは「憂愁に遭う」という意味に解するのが通説である。騷人とは、したがって、憂う人という意味になる。梁の昭明太子の「文選の序」に「楚人屈原、忠を含み潔を履み、君は從流に随ず、臣は逆耳を進め、深思遠慮、遂に湘南に放たれ、耿介の意既に傷み、憂鬱の懷悶る靡し、淵に臨んでは懷沙の志有り、沢に吟じては憔悴の客有り、騷人の文、茲より作る」とあるのに本づく。司馬遷の「史記」の屈原賈生列伝第二十四には、「屈原の離騷を作るは蓋し怨より生ず」とある。

9 「揚馬」揚雄と司馬相如。前二、二世紀の漢の時代に出た文人で、賦の代表的作家である。

10 「蕩」ひろびろと。〔無垠〕垠は涯。①みぎわ。岸。②はて。限り。などの意味がある。無垠は、はてしないこと。屈原の「九章」のうち「悲回風」の中に、「穆として眇眇として垠り無し」という句が見える。

12 「憲章」正しい法則。〔倫〕はろふ。沈没。

13 「自従」自ら従もそれぞれ一字でより、と読むが、自従と連用してもより、と読む。〔建安〕後漢の末期の年号。一九六—二〇〇年。当時、魏の曹操とその子の曹丕・曹植、および孔融・王粲・陳琳・徐幹・劉楨・应劭・阮瑀の、いわゆる建安の七子が出て、剛健で風骨のある詩を作り、建安体と称された。李白はこのころの詩風を高く評価しており、94「宣州の謝朓楼にて校書叔雲に餞別す」と題する詩の中で、「蓬萊の文章、建安の骨」とたたえている。〔采〕名詞・動詞のあとについて、それ以来、それ以後の意味。よりこのかたと読む習慣がある。

14 「綺麗」あやがあつて美しい。

15 「聖代」唐朝をさす。「元古」太古。

16 「垂衣」「周易」の繫辭伝に、「黃帝・堯・舜は衣裳を垂れて而して天下治まる」とあり、無為のままで天下がおさまること。「清真」すっきりとして、ありのまなこ。

17 「休明」やすらかであるか、御代。休は美、または慶。立派で、めでたく、光輝ある、よき時代のこと。

18 「乗運」時代の動きに乗って。「躍鱗」竜のうろこをおどらせる。すぐれた才能を発揮することの比喩。

19 「文質」形式と内容、文明と素朴、模様と生地など、いろいろな考えられる。

ここでは詩文の形式と内容、すなわち修辞と達意と解するのがよからう。「論語」の雍也第六に、「子曰く、質、文に勝てば則ち野。文、質に勝てば則ち史。文質彬彬として、然る後に君子なり」とある。「炳煥」あきらかに光りかがや

く。

20 「衆星」おびただしい星。多くの詩人の比喩。「秋空」秋の空。

21 「刪述」けずって、のべる。良くない所はけずり、良い所をのべつたえる。紀元前五世紀に孔子は、種々の文書を刪述して、永遠の古典である五経をつくった。ことに詩については、三千余篇の中から三百余篇の「詩経」を編集した、といわれる。そういう事業に、李白はあやかりたいというのである。

22 「垂輝」宋本は「重輝」となっているが、字の誤らしいので、通行本に従う。「千春」千年。

23 「希聖」聖を見ないといわねがう。聖は、聖人孔子。「如」もし。仮定の辞。「有立」成立する。成就する。

24 「絶筆於獲麟」孔子が魯の国の歴史「春秋」を編纂したとき、哀公十四年（前四八一年）の「春、西の狩りて麟を獲た（春、西狩獲麟）」という記事で筆を絶ったという。「春秋左氏伝」によると、西方の大野で狩りをしたとき、叔孫氏の車係の子鉏商という者が、麟をつかまえた。が、おかしい獣であった。孔子がそれを見て、「麟だ」といったという。麟、つまり麒麟は、聖天子が現われる瑞兆として天が使者として地上につかわされる神獣と考えられていたものであるが、天下が乱れている哀公十四年に出現して、身分のいやしい男の手につかまえられた。孔子はそれをなけいて、「こんな世の中に何をしに来たのか。麟が出てきて、死ぬ。わが道もこれで終った」といった、という話も伝わっている。ここでは、李白が孔子を慕う意味で、その故事を用いた。

2 古風 その二

ひきがえるが太清境までのさばって
この美しい仙宮の月をむしらばむ
まいる光が天空のまんなかで欠けてゆき
金色の満月がとうとうかくれてしまふ
虹が天の玉座にさしこみ
太陽が朝のひかりをうしなう
ただよう雲が二つの光——日と月をへだて
あらゆる物が黒い霧にとじこめられる
ひっそりとさびしい長門宮
昔はよかったが今はもうだめだ
桂の木に虫がつき花はさいても実はならぬ
天の霜気はきびしい威力をくだす
なげきながら長い夜をあかし
心ゆすぶられ涙が上衣をぬらす

其二

1 蟾蜍薄太清
2 蝕此瑤臺月
3 圓光虧中天
4 金魄遂淪沒
5 蟾蜍入紫微
6 大明夷朝暉
7 浮雲隔兩曜
8 萬象昏陰霏
9 蕭蕭長門宮

其二

蟾蜍太清に薄り
此の瑤臺の月を蝕す
圓光中天に虧け
金魄遂に淪没す
蟾蜍紫微に入り
大明朝暉を夷らる
浮雲兩曜を隔て
萬象陰霏を昏し
蕭蕭長門宮

10 昔是今已非
11 桂蠹花不實
12 天霜下嚴威
13 沈歎終永夕
14 感我涕沾衣

昔は是にして今は已に非なり
桂は蠹んで花さけども実らず
天霜 嚴威を下す
沈歎 永夕を終え
我を感じしめて涕衣を沾す

1 「蟾蜍」ひきがえる。「淮南子」の「精神訓」に、「月中に蟾蜍有り」といい、高誘の注に「蟾蜍は蝦蟇なり」とあり、また「説林訓」に、「月は天下を照らすも、蟾諸に蝕せらる」といい、高誘の注に「蟾諸は月中の蝦蟇、月を食う、故に蟾諸に蝕せられると曰う」とある。「薄」せまる（迫）。おかす（侵）。「太清」天上にある世界。道家でいわゆる三清の一つ。聖人は玉清に登り、真人は上清に登り、仙人は太清に登るといふ。

2 「蝕」日月が欠けること。虫が草木の葉を食いあらすように、すこしずつ、だんだんと欠けてゆくから、蝕（むしばむ）という。「瑤台」たまのうてな。仙女の居所。

3 「虧」欠ける。

4 「金魄」魄は、月の暗い影の部分で、一日の月は死魄といい、十五日の月は生魄という。金魄とは、満月の影が明るく輝き、あたかも金のようなものであるから金魄という。「遂」とうとう、その結果、かくて。「淪没」沈む。

5 「蟬蛻」虹。「詩経」国風の鄘風に「蟬蛻」三章あり、毛伝に「虹也」。蟬と蛻とは相通じる。虹はきれいなものとしては意識されず、天と地が交わるときに生れる、けがらわしい現象として意識された。「紫微」天帝の居所。がんらいは星座の名で、北斗の北にある十五星。転じて、皇居、ないしは玉座にたとえる。

6 「大明」太陽。「夷」たいらげる。ほろぼす。

7 「兩耀」ふたつの光、つまり日と月。

8 「陰霏」くらしい霧。

9 「蕭蕭」さびしい様子。「長門宮」長安の東南の郊外にある離宮の名。漢の武帝のはじめの皇后である陳皇后は、幼名を阿嬌といい、武帝といと同土であり、幼いころから武帝のお気に入りであったと伝えられる。母親の館陶長公主が大奥に勢力をもっていたので、皇太子妃となり、やがて武帝の即位とともに、皇后となった。彼女には子がなかった。やがて帝の寵愛が衛子夫に移ると、氣

位が高く、かつ嫉妬ぶかい彼女は、死ぬほどのやきもちをやくことがしばしばであった。そのためにかえって帝の怒りを買った。皇后は巫の妖術を使つて帝をのろっているという噂がとび、楚服という巫が大逆罪でつかまり、三百余名の者がまぎぞえをこくつた。皇后もその印綬を返上して、長門宮に移るように申し渡された。長門宮はもともと館陶長公主の別荘であったのを、帝に献上した離宮であった。城外の長門宮に幽閉された陳皇后は、閑々の日々を送っていたが、当時の文章の名人、司馬相如にたのみ、黄金百斤を与えて、自分の気持をうたいこんだ「長門の賦」を作ってもらい、それによって帝の愛情をとりもどすことができたというロマンスが伝わっている。「長門の賦」は「文選」巻十六に取められたが、この話は後世の詩人の詩によくうたいこまれ、李白にも109「白頭吟」、125「妾薄命」、349「長門怨」などの作がある。

11 「桂蠹花不実」蠹は、虫が食うこと。「漢書」巻二十七、五行志に見える「成帝の時の歌謡」に「桂樹華不実、黄爵巢其顛」とある。桂の樹は花が咲いても実のならぬうちに、黄ろい雀がそのてつべんに巢をつくる。桂樹華さきて実らざるに、黄爵は其の顛に巢くう。「桂樹」は花も皮も赤いので、五行説の火徳によつて王となった漢にたとえ、「華さきて実らず」とは成帝に世つぎのないことを暗示し、「黄爵」は土徳を称して王になろうとした王莽になどえ、と解釈される。漢の天下は栄えているように見えても、世つぎがなく、王莽が王位をうばおうとしている、という時事を憂えた歌謡らしい。なお、この両句のあとに「昔は人の羨む所と為り、今は人の憐れむ所と為る（昔為人所羨、今為人所憐）」とつづいて歌謡は結ばれているが、これは李白の「昔是今已非」という前の句の発想と関連するように思われる。

3 古風 その三

秦の始皇帝は世界をはらいきよめ虎のような睨みはなんと力強いことか剣をふるって浮雲を切る

諸侯は一人のこらず西へ来て降服するすぐれた判断は天が開いてくれたもので大きな計画は多くの才士を使いこなす

武器をあつめて銅の大人形をつくり
函谷関は東にむかつて門を開く
会稽山にのぼって自分の功績を石に刻み
琅邪台にのぼってはるかに海上を眺める
囚人七十万をつかつて

驪山のふもとに土木工事はじめたが
しかもなお不死の仙薬を採りよせようとして
思うようにならず茫然と心をかなしませる
連弩式の石弓で海中の大魚を射たが
あらわれた長い鯨はなんと山ほどの大きさ
ひたいと鼻は五岳のかたちをし
波をかきたて雲と雷をふきあげる
ひれとひげは青空をおおいかくし
とても蓬萊など見られるわけがない
徐市は秦の童女をのせて出かけたが
その楼船はいつかえて来よう
いまはただ見るふかいふかい地の底で
こがねの棺につめたい灰が葬られているのを

其三

1 秦皇掃六合
2 虎視何雄哉
3 揮劍決浮雲
4 諸侯盡西來
5 明斷自天啓
6 大略駕羣才
7 收兵鑄金人
8 函谷正東開
9 銘功會稽嶺

其三

秦皇六合を掃いて
虎視何ぞ雄なる哉
劍を揮つて浮雲を決れば
諸侯尽く西に來る
明斷天より啓き
大略羣才を駕す
兵を収めて金人を鑄
函谷正に東に開く
功を銘す會稽の嶺

10 聘望琅邪臺
11 刑徒七十萬
12 起土驪山隈
13 尙採不死藥
14 茫然使心哀
15 連弩射海魚
16 長鯨正崔嵬
17 額鼻象五嶽
18 揚波噴雲雷
19 警蹙蔽青天
20 何由覩蓬萊
21 徐市載秦女
22 樓船幾時回
23 但見三泉下
24 金棺葬寒灰

望みを馳せ琅邪の台
刑徒七十萬
土を起す驪山の隈
尚お不死の薬を採り
茫然として心をして哀しましむ
連弩海魚を射
長鯨正に崔嵬
額鼻は五岳に象り
波を揚げて雲雷を噴く
警蹙青天を蔽い
何に由りてか蓬萊を覩ん
徐市秦女を載す
樓船幾時か回る
但だ見る三泉の下
金棺寒灰を葬るを

1 〔秦皇〕秦の始皇帝。「六合」東・西・南・北・上・下の六つの方向。世界。
天下。

2 〔虎視〕猛虎がにらみをきかすこと。勢いの盛んで強いことのとえ。〔何雄
哉〕何は感嘆、なんとまあ。

3 〔揮劍決浮雲〕決は、切る。「莊子」説劍篇に「天子の劍は、……上は浮雲を
決り、下は地紀（大地の根本）を絶つ。此の劍一たび用うれば、諸侯を匡し、
天下服す矣」とある。

4 〔諸侯盡西來〕戦国時代の諸侯、すなわち斉・楚・燕・韓・魏・趙の六国の王
たちは、みな降服して西のかた秦に來た。

5 〔明斷〕すぐれた判断。英明果斷。

6 〔大略〕大きなはかりごと。すぐれた計略。「漢書」武帝紀の贊に「武帝の雄
材大略」ということが見える。

7 〔收兵鑄金人〕「史記」の始皇本紀の二十六年の条に「天下の兵（武器）を取
めて咸陽に集め、これをとかして鐘鐻（鐘や鼓をかける台）と金人（銅製の大
人形）十二をつくり、重さはそれぞれ千石（一石は普通人がかつげる重さ）で、

「宮廷に置いた」とある。

8 「函谷」秦の東境にある関所の名。いまの河南省の西端。秦はここを守って開閉を厳重にしていたが、六国を滅ぼし天下を統一したので常に「東に開く」わけである。

9 「銘功会稽嶺」「史記」の始皇本紀、三十七年に「会稽山（浙江省紹興）に上つて大禹（夏の禹王）を祭り、南海を望んで石を立て、文字を刻んで秦の徳をたたえた」とある。

10 「騶望琅邪台」琅邪は、瑯邪とも、また瑯邪とも書く。「史記」始皇本紀、二十八「南の」かた琅邪山（山東省諸城縣東南）に登って大いに楽しみ、滯留三ヶ月、平民三万戸を琅邪山のふもとに移し、十二年間免稅することにし、琅邪台を作つて石を立て、秦の徳をたたえた。」

11 「刑徒七十万」同じく始皇本紀、三十五年「始皇は阿房宮を作つた。東西五百歩、南北五十丈、二階建てで上は万人を坐らすことができ、下は五丈の旗を建てることのできた。めぐりめぐつた閑道（屋根つきの道）をつくり、宮殿の下から南山に直通していた。……当時、宮刑になった者や、徒刑になった者が七十万人あつたが、これらを分けて阿房宮を作らせたり、驪山の宮を作らせたりした。北山の石を切り出し、蜀（四川）や荊（長江の南）の材を運ぶなど、あらゆる資材があつめられ、関中に作られた宮殿は三百、関外（函谷関外）には四百あつた。」

12 「驪山」いまの陝西省臨潼縣の東南、つまり咸陽の東の郊外にある山。

13 「尚採不死藥」「史記」始皇本紀、三十二年「韓終・侯公・石生に命じ仙人の不死の藥を求めさせた。」

14 「茫然」氣拔けしてぼんやりしているさま。

15 「連弩」数本ないし数十本の矢を連続して発射できるような仕掛けの石弓。

「漢書」李陵伝に「連弩を発して單于を射る」とあり、その注に、服虔は「三十弩、一弦を共にする也」といい、張晏は「一臂を共にする也」という。「海魚」大鯢。「連弩射海魚」「史記」始皇本紀、二十八「齊の人、徐市らが上書して、海中に三つの神山があり、蓬萊・方丈・瀛洲と申しまして仙人が住んでおります、齋戒して童男童女を連れ、仙人を探したいと存じます」と言つた。そこで徐市を派遣し、童男童女数千人を出して海上に仙人を求めさせた。」三十七年「方士の徐市らは、海上に神藥を求めて、数年になるが得られず、費用が多かるだけだったので、罰せられることを恐れ、いつわつて、蓬萊では神藥を得られるのですが、いつも大鯢に苦しめられて、島に行くこと

ができないのです、上手な射手を付けていただければ、現われたら連弩で射るのですが、と言つた。始皇帝は、海神と戦う夢をみたが、海神は人間のような姿をしていた。夢占いの博士に問うと、水神は目では見えないが、大魚・蛟竜をそのきざしとします、いま帝は謹んで祈禱されたのにこの惡神が現われまして、除き去るべきです、そうすれば善神を招くことができましょう、と答えた。そこで海上に行く者に大魚を捕える道具を持たせ、始皇みずから連弩を手にし、大魚が出たらこれを射とめようと、琅邪から北上し榮成山まで行つたが、ついに現われなかった。之衆に達したとき、大魚があらわれたので、その一魚を射殺した。さらに海岸に沿うて西行し、平原津についたとき、始皇は病氣になった。」この病氣がもとで、始皇帝はやがて亡くなった。

16 「長鯨」大くじら。「崔嵬」高くて急な、石山の形容。

17 「五岳」中国の五つの名山。東岳（泰山・山東省・南岳（衡山・湖南省）、西岳（華山・陝西省）、北岳（恒山・山西省）、中岳（嵩山・河南省）。

19 「鬻鬻」ひれとひげ。

20 「蓬萊」海上にあるといわれる仙人の島。

21 「徐市」秦の始皇をだましたいかさま師。徐福ともいう。不老不死の藥を求め蓬萊におもむき、日本の紀伊国熊野浦に着いて、そのまま住みついたという。和歌山県新宮市に徐福の墓と伝えられるものがある。

22 「樓船」二階つくりの屋形船。

23 「三泉」地下水の層を三つ掘りぬいた深い地底。「史記」始皇本紀に「始皇を驪山に葬る。始皇が初めて帝位に即いた時、驪山のふもとに陵をつくるため穴を掘り、天下をあわせたのちは、天下の徒刑の罪人七十余万人をつかって、三泉の下まで掘り、銅を以て下をふさぎ、外棺を入れた。塚の中に宮殿や百官の席をつくり、珍奇な器物を宮中から移していっぱい入れた」とある。

24 「寒灰」つめたい灰。死骸は火葬しないが、しだいに風化して灰になる。

4 古風 その四

鳳凰は九千仞の空高く飛び
五色の珍しいもようを備えている
巻物を口にくわえたまままわしく帰ってきて

- 1 鳳飛九千仞
2 五章備綵珍
3 銜書且虛歸
4 空入周與秦
5 橫絕歷四海
6 所居未得鄰
7 吾營紫河車
8 千載落風塵

そのまま周と秦に入ってしまう
まっすぐに空を横ぎり四海をめぐったが
よき隣人のいるすまいはまだみつからない
わたしは「紫河車」の薬をつくり
とこしえに世俗のちりから足を洗いたい
仙薬は海岳の中にかくされているので
鉛を青溪のほとりで採集する
ついでに大棲山にのぼり
頭をあげて仙人のいるほうをながめる
彼は鶴にのってたちまち姿を消し
つむじ風の車も車輪のあとを絶つ
やはり心配なのは仙薬のできるのがおそく
わたしの願いがかなえられないことである
いたずらに鏡の中の髪を霜のように白くして
かの鶴にのった仙人に対してはすかしく思う
桃李はどこに咲こうが
この花はわが春ではない
ただ清都のあたりで
いつまでも韓衆と仲よくしたい

其四

其四

鳳飛ぶこと九千仞
五章綵珍を備う
書を銜んで且つ虚しく帰る
空しく周と秦とに入る
横絶して四海を歴
居る所未だ隣を得ず
吾紫河の車を営み
千載風塵より落けんとす

- 9 藥物秘海嶽
10 採鉛青溪濱
11 時登大樓山
12 舉首望仙眞
13 羽駕滅去影
14 飈車絶回輪
15 尚恐丹液遲
16 志願不及申
17 徒霜鏡中髮
18 羞彼鶴上人
19 桃李何處開
20 此花非我春
21 唯應清都境
22 長與韓衆親
- 藥物海嶽に秘し
鉛を採る青溪の浜
時に大樓山に登り
首を挙げて仙眞を望む
羽駕の去影を滅し
飈車を絶つ
尚お恐る丹液の遅く
志願申ぶるに及ばざるを
徒らに鏡中の髪を霜にして
彼の鶴上人に羞づ
桃李は何れの処にか開く
此の花は我が春に非ず
唯だ応に清都の境
長えに韓衆と親しむべし

1 〔鳳〕はうおう。雄を鳳、雌を凰といい、想像上の動物。聖人が天子の位にあれば、それに応じて現われるという瑞鳥である。形は、前は麟、後は鹿、くびは蛇、尾は魚、もようは竜、背は亀、あごは燕、くちばしは鶴に似、羽の色は五色、声は五音に中る。梧桐に宿り、竹の実を食ひ、醴泉の水を飲む、といわれる。「九千仞」仞はひろ。からだを横に曲けて両手を伸ばした長さで、周代の尺で七尺にあたり、深さ・高さを測るのに用いる。周の一尺は約二二・五センチメートルだから一仞は一五七・五センチメートルになる。

2 〔五章〕色の五種類の組合せ。「春秋左氏伝」昭公二十五年の条の杜預の注に「青と赤のもようを文といい、赤と白のもようを章といい、白と黒のもようを黼といい、黒と青のもようを黻といい、五色（青赤白黒黄）そろったもようを繡といい、以上の五章をあつめて五色のはたらきを完成する」とある。

3 〔銜書〕「宋書」に「鳳凰書を銜んで文王の都に遊ぶ。書に曰く、殷の帝は無道にして天下を虐乱せり、黄命はすでに移り、また久しきを得ず、靈祇（神）は遠く離れ、百神も吹き去る、五星（木星・火星・金星・土星・水星）房に聚まり、四海を昭らかに理む」とある。

5 〔横絶〕横切り渡る。絶は、飛んでまっすぐに渡ること。「漢書」張良伝に「羽

翼以て就り、四海を横絶す。」「〔四海〕四方の海。ないし、四方の海の内、すなわち、天下、世界。

6 「未得隣」論語「里仁第四に「子曰く、徳は孤ならず、必ず鄰有り。」「道德は孤立しない、かならず良き隣人がある、という孔子の言葉をふまえ、まだそういう隣人のいる場所を見つけない、という意味。

7 「紫河車」仙薬のこと。道家の煉薬法によると、一斗の水をなべの中で沸騰させ、九回の聖石に煮つめ、はじめにできたのを姪女、次のを玉液といい、それから紫色になったものを紫河車といい、白色を白河車といい、青色を青河車といい、赤色を赤河車という、ということである。

8 「千載」千年。〔蒼〕脱けること。〔風塵〕人の世、俗世界。

9 「海岳」はるか東の海上に浮かぶ仙島の山、か。

10 「青溪」清溪と同じだとすれば、李白の詩にたびたび出てくる地名。いまの安徽省貴池県。唐代には池州と呼ばれて揚子江沿岸にあり、「秋浦歌」などに歌われる。〔浜〕水のほとり。みぎわ。

11 「大棲山」「一統志」に「大棲山は池州府城の南七十里に在り。」

12 「仙真」仙人。

13 「羽駕」鶴にのること。楊齊賢の説に、「羽駕は鸞鶴に乗るを言う。」

14 「鸞車」鸞は、つむじかぜ（旋風）、または、はやて（疾風）。楊齊賢の説に「鸞車は風雲に御するを言う。」「（回輪）車輪のことであろう。〔西王母伝〕に、

仙女の西王母の住居は崑崙山にあるが、山のふもととはひろびろとした水にとりまかれて「鸞車羽輪に非ざれば到るべからざる也」とある。

15 「丹液」仙薬のこと。「漢武内伝」に「其の次の薬に九丹、金液、千あり。これを服するを得ば、白日天に升る。此れ飛仙の服する所にして、地仙の見る所に非ざる也」とある。

16 「申」伸ばす。

17 「徒霜鏡中髪」いたすらに年をとる。霜髪は白髪のとえ。

18 「鶴上人」鶴にのった仙人。

19 「桃李」ももと、すもも。

21 「清都」天帝の居所。「列子」周穆王第三に「王夷に以為えらく、清都、紫微、鈞天広衆は帝の居る所なり」とある。

22 「韓衆」仙人の名。「楚辞」七諫に「韓衆を見て之に宿し、天道の在る所を問う」とあり、王逸の注に、「韓衆とは仙人なり、天道とは長生の道なり、衆は一に終に作る」とある。また「抱朴子」に「韓衆、葛蒲を服すること十三年、

身に毛を生じ、日に書万言を視、皆之を誦し、冬恒に寒からず」とある。

5 古風 その五

太白山はなんととおおおしていることよ
星がその上におごそかにならんでいる
山頂は天からわずかに三百里
はるかに俗世間とかけはなれている
山中にみどりの黒髪の翁がいて
雲をきものとし松につもる雪を寢床にする
笑いもしなければ語りもせず
ひっそりと洞窟の中にすんでいる
わたしは仙人に会いに来て
最敬礼をして仙術の奥の手をたずねた
仙人はふとにっこりと笑い
仙薬のねりかたを教えてくれた
骨にはりつけてその言葉を承っていると
翁は身をそびやかして稲妻のようにきえ去った
上をふりあおいだがもはや追つかず
ふつつと胸の中が煮えくりかえる
わたしは今後 丹砂をつくるべく心がけ
永久に世間の人びとと別れよう

其五

1 太白何蒼蒼
2 星辰上森列
3 去天三百里
4 邈爾與世絕

其五

太白何蒼蒼たる
星辰上に森列す
天を去る三百里
邈爾として世と絶つ

5 中有緑髮翁
6 披雲臥松雪
7 不笑亦不語
8 冥棲在巖穴
9 我來逢真人
10 長跪問寶訣
11 粲然忽自哂
12 授以鍊藥說
13 銘骨傳其語
14 疎身已電滅
15 仰望不可及
16 蒼然五情熱
17 吾將營丹砂
18 永與世人別

中に緑髮の翁有り
雲を披りて松雪に臥す
笑はず亦た語らず
冥棲して巖穴に在り
我來つて真人に逢い
長跪して宝訣を問う
粲然として忽ち自から哂い
授くるに鍊藥の説を以てす
骨に銘じて其の語を伝ふるに
身を疎して已に電のごとく滅ゆ
仰望むも及ぶ可からず
蒼然として五情熱す
吾將に丹砂を営み
永く世人と別れんとす

1 「太白」山の名。長安の西方二百里、武功（今の陝西省関中道郿県）の南にあり、終南山の山脈の西に接している。非常に高い山で、頂には年じゅう、雪がつもっている。山上に洞窟があり、道教でいうところの第十一洞天である。李白はこの山に登り、「登太白峰」という詩を作っている。「蒼蒼」山がおおおおとして、そのようす。
2 「星辰」星も辰も、ほし。「森列」いかめしくならぶ。
3 「去天三百里」「武功の太白、天を去ること三百里」という民間の言い伝えがある。

4 「遼爾」はるかなるさま。「遼爾与世絶」陶淵明の「癸卯の歲十二月中に作る、徒弟敬遠に与う」の時に「遼として世と相絶つ（遼与世相絶）」という句がある。

5 「緑髮」黒髪のこと。黒色の光沢のあるものは濃い緑に似るゆえに、そういう仙人は年をとっても白髪にならないのである。

6 「披」着物としてきる。被と同じ。「披雲臥松雪」謝靈運の「石門新宮所住、四面高山・廻溪・石澗・脩竹・茂林」という詩（文選・卷三十）に「雲を披りて石門に臥す（披雲臥石門）」という句がある。

8 「冥棲」ひっそりとしたところにくらす。
9 「真人」仙人。道教の奥義を研究し修練を積んだ人。
10 「長跪」両膝を地に着け腰と股を伸ばし身を立ててすわること。曹植の「飛竜篇」に「我れ真人を知り、長跪して道を問う」とある。「宝訣」宝のような秘訣。

11 「粲然」笑う様子。東晋の郭璞の「遊仙詩」（「文選」卷二十一）に「靈妃我を顧みて笑ひ、粲然として玉齒を啓く（靈妃顧我笑、粲然啓玉齒）」という句があり、李白詩集も一本には「粲然啓玉齒」に作る。

12 「鍊藥」仙薬をねることを。丹砂（水銀と硫黄の化合した赤色の土）を何回もねり上げると黄金となり、それを服むと仙人になれるという。くわしくは、吉田光邦「鍊金術」（中公新書）を見よ。

13 「銘骨」銘は、金や石などの器物に刻みこんで、書きしるしたもの、または書きしるすこと。心におぼえこんで忘れないことを「銘肌鏤骨」（はだにほりつけ、骨にちりばめる）などという。

14 「疎身」疎は疎と通じ、そびやかす。そばだてる。身をそびやかして空中に飛び上がる姿勢をとること。仙人が上天すること。「抱朴子」対俗篇に「夫の道を得る者は、上は能く身を雲霄に疎かし、下は能く形を川海に潜める」とある。

16 「蒼然」春の草木が萌え出るさま。「五情」喜び・怒り・哀しみ・楽しみ・怒みの五つの感情。ここでは、そうした感情のすみかである胸の中が、という意味。陶淵明の「影 形に答う」詩に「身没すれば名も亦た尽きん、之を念えば五情熱す（身没名亦尽、念之五情熱）」とある。

6 古風 その六

代の馬は南の越の国へ行きたがらないし
越の鳥は北の燕の国をこいしくは思わない
感情や性質には慣れというものがあり
土地のならわしもともそうさせるのである
むかし雁門の関所でなつかしい故国をはなれ
いまは童庭の前のまもりにつかされている

まいあがる砂ぼこりは海の日の光を散乱させ
ふぶきがえびすの空にみだれとぶ

しらみが兵士の服や帽子にわく

兵士のたましいは軍旗を追っかける

苦しいいくさしても手柄をほめてもらえず

忠義のまごころもなかなかあらわしくい

だれが飛將軍李広を哀れにおもうだろうか

しらが頭で国境をかけめぐって死んだというのに

其六

1 代馬不思越

2 越禽不戀燕

3 情性有所習

4 土風固其然

5 昔別雁門關

6 今戍龍庭前

7 驚沙亂海日

8 飛雪迷胡天

9 蟣蝨生虎羆

10 心魂逐旌旆

11 苦戰功不賞

12 忠誠難可宣

13 誰憐李飛將

14 白首沒三邊

其六

代馬は越を思わず

越禽は燕を恋わず

情性は習う所有り

土風固より其れ然り

昔は雁門の関に別れ

今は龍庭の前を成る

驚沙を亂し

飛雪に迷う

胡天に迷う

蟣蝨に生じ

心魂を逐う

苦戦すれども功は賞せられず

忠誠は宣ふ可きこと難し

誰か憐れむ李飛將

白首にして三邊に没するを

1 〔代馬〕代郡（山西省北部の地名）に産する馬。曹植の「朔風」詩に「願わくは代馬を聘せ、倏忽として北に徂かん（願ひ代馬、倏忽北徂）」という句がある。

2 〔越禽〕越の国（浙江省紹興附近）の鳥。「古詩十九首」（「文選」卷二十九）の

第一首に「胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巣くう（胡馬依北風、越鳥巢南枝）」とあり、また曹植の「朔風」詩に「願わくは越鳥に随ひ、翻飛して南に翔けらん（願隨越鳥、翻飛南翔）」とある。〔燕〕河北省方面。

3 〔情性〕感情や性質。

4 〔土風〕土地の風俗。

3 4 〔情性有所習 土風固其然〕張協の「雜詩」（「文選」卷二十九）に「流波恋旧浦 行雲思故山 閨越衣文蛇 胡馬顧度燕 土風安所習 由来有固然」とあり、字句が似通っている。「流波は旧浦を恋ひ、行雲は故山を思ふ。閨越は文蛇を衣、胡馬は燕に度らんことを願う。土風の習う所に安んずるは、由来固より然る有り。」生れて以来なれしたしんだ故郷の風土におちつきたいのは、もとより当然のことである。

5 〔雁門関〕「山西通史」に「雁門山は代州の北三十五里に在り。双関（二つの門が陡絶（けわしくそそりたち、雁の過ぎんと欲する者、必ず此の徑に由る、故に名づく。一名雁門塞。山に倚りて関を立て、之を雁門関と謂う。山西の関、凡そ四十有余、皆隘に踞り固を保つ（山あいの狭い道にうすくまつて要所を守っている、而も鑿拔（すばぬけて）雄壮なるは則ち雁門を最と為す。趙の李牧、漢の鄧都、辺に此に備え、匈奴敢て塞固に近つかざるは、皆一時の良將なれども、地の險を藉るに非ずと謂うべからざるなり」とある。つまり北の国境にある要塞である。

6 〔龍庭〕匈奴の王の單于が天をまつところ。そこは砂漠地帯である。

7 〔驚沙〕騒ぎ立つ砂塵。〔海日〕海の大陽。この場合、海は、砂漠の中にある大きな湖のこと。

8 〔胡天〕えびすの国の空。胡は、北方から西方にかけての異民族の総称。

9 〔蟣蝨〕しらみ。〔虎羆〕虎とやまどり。羆は、きしの一で、喧嘩をこのみ、相手を殺すまで闘いをやめないうという猛烈な鳥である。後漢のとき、近衛兵は、おそろしい虎の絵を軍服にえがき、やまどりの尾を冠にかざった。そこで、虎

羆といへば、兵隊の装束をさす。

10 〔旌旆〕旗も旆も、はたの一種。旌は、はたさおの上に鸞牛の尾をつけ、これに鳥の羽をつけたはた。旆は、絹布でつくった赤色で模様のないはた。

13 〔李飛將〕漢の時代の名將、李広のこと。「史記」李將軍列伝に「天子（武帝）は広を召して右北平郡の太守とした。……匈奴はこれを知いて、漢の飛將軍とあだなをつけ、数年間かれを避け、右北平に侵入しようとはしなかった」という。右北平とは、河北省東北部から熱河省東南部にまたがる郡である。また次